

蝶々夫人 (1955)

MADAME BUTTERFLY

メディア 映画

ジャンル ドラマ 音楽

製作国 イタリア/日本

色彩 Color

時間 114分

初公開日 1955/06/03

公開情報 東宝

【解説】

プッチーニの有名なオペラの映画化。監督は、音楽映画を多く手がけた伊の老匠ガローネ（「おもかげ」）。完全なセット撮影の人工的世界に最初面食らうが、このオペラ自体、曲解された美しき東洋が根底にあるため、それを覆すリアリズムの導入は原作の精神を汚すことになる。一編のファンタジーとして楽しめればよいわけで、極めて原典に忠実に作られた本作の真摯さは、古臭い筋書きを超越した感動を観る者にもたらすはずだ。八千草薫の蝶々夫人も適役（むろん歌は吹き替えだが）。ピンカートンには当時人気のテノール、N・フィラクリディが扮する。舞台で言えば二幕目の終わり、ハミング・コーラスで唄われる“Coro a bocca chiusa”は、ピーター・ジャクソンの傑作「乙女の祈り」でクライマックスの殺害の前兆場面で使われ、胸かきむしられるような効果を出していた甘美な名曲で、本作でも、宝塚の面々による舞踏を伴い、ハッとするような美しさを出していた。

【クレジット】

監督	カルミネ・ガローネ	Carmine Gallone
製作	ギドー・ルツアート	Guido Luzzatto
	森岩雄	
	川喜多長政	
原作	プッチーニ	Puccini
脚本	カルミネ・ガローネ	Carmine Gallone
	森岩雄	
撮影	クロード・ルノワール	Claude Renoir
美術	三林亮太郎	
	マリオ・ガルブリア	Mario Garbuglia
指揮	オリヴィエロ・デ・ファブリティース	
出演	八千草薫	
	ニコラ・フィラクリディ	Nicola Filacuridi
	田中路子	
	中村哲	Satoshi Nakamura
	小杉義男	
	高木清	